Heartbreak Court　　茶道戦士オートモ

太陽で熱せられたコンクリートの地面を蹴り、風を切り前に進む。真上から照りつけてくる太陽を恨めしく思いながらも、校庭の外周をひた走っていた。

近くの林から聞こえてくる蝉の鳴き声。陽炎の見える道路。汗で蒸れる帽子。汗の染みこんだシャツ。それら様々な要素が、真面目に走ることを馬鹿馬鹿しく感じさせるが、これも彼女と一緒にいるためだと自分に言い聞かせた。

「新倉君！　後、一周！　がんばって！」

「はい。青島さん！」

彼女の可憐な声で、今までの疲れが一気に吹き飛び、そう笑顔で返した。色白で華奢な麗しきテニス部のマネージャー、それが青島さんだ。

彼女の後を追うようにテニス部に入ってから、早四か月が過ぎて、もう夏休みになってしまった。近いうちに彼女を誘ってどこかに出かけよう。そんな事を考えてにやけていると、後ろから何かがぶつかって転びそうになる。

「ちんたら走るな。邪魔だ」

涼しげな声が聞こえた。

何とか体勢を立て直して顔をあげると、自分すぐ横を長身の男が走り抜けていく。

「な……おい、待てよ。伊藤！」

速いペースでどんどん距離を空けていく後ろ姿に、そう怒鳴りつけて俺もペースを上げる。すぐに彼の横に並ぶと、負けず嫌いめ、さらに速く走り置いていこうとする。

負けじと俺も足に力を込めて、全力疾走する。まだゴールまで三百メートル以上あるが、構うものか。すぐに呼吸が上がって苦しくなる。スピードも落ちてくるが、それはこいつも同じだ。

部活前の長距離走で疲れるのは馬鹿みたいだと頭に浮かんでくるが、俺の帰りを待っている青島さんに雄姿を見せる時だと自分に言い聞かせた。

そう、こう考えれば辛くない。勝利の女神（青島さん）は勝利者に微笑むだろう。つまり、ここで伊藤を完膚なきまでに叩きつぶせば、彼女は俺に惚れ、付き合えるかもしれない。と、自分に都合のいい考えをして、萎えそうになる気持ちを盛り上げる。

後、三十メートル。思うように上がらない太ももに力を入れようとすると、伊藤が自分の前に出た。

本気じゃなかったのか。それに気づいて、負けるものかと追いかけようとした時には、すでに遅かった。

「ゴール！」

元気一杯な青島さんの声が聞こえた。

走り終わった瞬間に、下半身から力が抜けて崩れ落ちそうになるが、何とか膝に手をあてて耐えた。何でも走った直後に座るのは、心臓に悪いらしい。
「おしかったねえ」
大体呼吸も整って体を起こすと、少し楽しそうに青島さんが笑いながら言う。
「いやぁ、別に勝負してたわけじゃないですし、おしいも何もねえっすよ！」
青島さんの輝く笑顔を見ていると、疲労感と悔しさで荒んでいた自分の心に、ほんわぁと幸せな気分が溢れてくる。自然と緩む頬を引き締めようとするが、うまくできない。
そんな事を考えていると、くるっと青島さんは向きをかえて、いつも通りにむすっと突っ立っている伊藤に近づいて行った。
「それにしても、伊藤君は本当に凄いなぁ」
「別に、大した事じゃない」
またまたぁ謙遜しちゃってぇと、青島さんは伊藤の肩をぽんと叩いた。その二人の距離が妙に近く、幸せだった気分は一気に消え失せ、伊藤に対する怒りがメラメラと燃えあがった。
馴れ馴れしいんだよ、この無愛想野郎。
「何が大したことじゃないだよ。まさかこの程度のランニングで勝ったつもりじゃないだろうな」
「勝負してないって言ったのは、お前だろうが」
無表情が、若干呆れ顔になった気がして、それにますます苛立つ。
「うるせえんだよ、この鉄仮面。テニス部員なら、テニスで勝負だ！」
自分でも無茶苦茶だと思いながら、伊藤の顔を無意味に指差した。ランニングでは後れを取ったが、次は絶対に負けない。ここでこいつをぶっつぶして、青島さんの前で醜態を晒させてやる。
伊藤は三秒ほど無言で何やら考えた後「別に構わないが」と呟くように言った。
「どうでもいいけど、鉄仮面って……もしかして、鉄面皮のこと？」
「……そう、それ！」
困惑していても可愛い青島さんの言葉に、俺はゆるみきった笑顔でうなずいてから、伊藤を連れてテニスコートへ向かって歩いた。

「ゲームセット&マッチ、伊藤。シックスゲームストゥツー」
何か、ひどくあっさりと負けた。
試合が終わるとすぐに、テニススクールがあるからと帰っていく伊藤の背中にブーイングを送る。

しかし、これも考えようによってはチャンスだ。
『青島さん……何回やっても、何回やっても、伊藤を倒せないんだ！　慰めてよ。そのスレンダーな体で！』
『まあ、新倉君たら……でも、新倉君なら……』
何ちゃって。
そこまで考えて急に空しくなり、水筒を取り出して麦茶を飲んだ。元々、青島さんにつられて入部したテニス部だから、負けても悔しくはない。
青島さんにいいところを見せて、惚れさせる。
それが全てなのだ。
ふと、負けた悔しさに一人で練習をしている姿を見たら、惚れてしまうのではないかと思い付いて、コートから出る。
どこで練習すれば青島さんに見つかりやすいか、などと考えながら歩いていると、伊藤の後を追いかける彼女の姿を見つけて、足を止めた。
青島さんが追いつくと、伊藤はいつもの帰り道の方向とは逆の、誰も通らないような細い道へと連れて行った。
自分でもストーカー染みているように感じたが、それが妙に気になって走りだした。あのむっつりスケベ、人目がないところに連れて行って、変なことをしないだろうな。そうだ、ピンチなところを助けに入れば、すごくかっこいい。
そんなことを考えながら、二人が行った先を顔だけで覗いてみると、二人の姿を見つけ、すぐに引っ込めた。思った以上に近く、隠れたままでも二人の声は聞こえそうだ。
「あの……急に、こんなこと言われても困るかもしれないけど……」
普段の元気な青島さんからは、想像ができないほどに小さな声だった。聞き取れたのは、おそらく愛ゆえだろう。
「何だ？」
無愛想の一言に尽きる、伊藤の高圧的な声。
その声を聞きながら、先ほどの青島さんの言葉を思い出して、嫌な予感が生まれた。いや、そんなはずはない。テニスにしか興味を示さず、コミュニケーション能力が極端に低い鉄仮面が、女に好かれる要素なんてあるわけがない。
「さっきの、新倉君との試合を見てて、わかったの。うん。前からわかっていたけど、確信したんだ……」
「だから、何なんだ？」
『負けていても頑張る新倉君って素敵。惚れちゃった。だから、協力して！　鉄仮面！』
きっと、そうに違いない。
ははは。全く愛らしい人だな、青島さんは。それならそうと、早く言ってくれれば……いや、もっと早く俺から動くべきだったのだ。

「好きです。ずっと前から……見てました！」
他に解釈のしようがない、青島さんから伊藤に対する、いわゆる愛の告白であった。
俺は、伊藤がそれに対して何と答えるのか、それから二人がどうなってしまうのか知るのが恐ろしく、その場から逃げ出した。

ぼんやりとした視界の中で、ドット絵のモンスターが死んで消えていく。敵を倒した後、何も考えずに勇者たちをダンジョンの奥へと歩かせていく。
「なあ、いいのか？」
「あんだよ？」
テレビ画面から目を離さずに、投げやりに答えた。
「一週間、毎日俺の家に来てるけど、テニス部はいいのか？」
「別に、いいんじゃねえの」
言いながら、テーブルの上にあるポテチをつまむと、再び現れた敵を攻撃する。友人が面白いと絶賛していたゲームだが、どこが楽しいのか全くわからない。ゲームだけではない。一週間前のあの日以来、世界が色を失ったようだった。
何をやっても、何を見てもつまらない。テニス部に出なくなるだけで、これほどまでに時間が有り余ってしまうとは思ってもいなかった。
今は青島さんにも伊藤にも会いたくない。だから、夏休みという膨大な時間をつぶすために、帰宅部の友人の家で毎日つまらないゲームをしていた。
「……失恋したのはショックだろうけど、辞めちゃっていいのか。青島さんに会うためっていう理由だけど、毎日部活を頑張ってたんだろ？」
この一週間で、何度目になるか分からないその言葉にイライラしながら、再び適当に答えてゲームに没頭しているふりをした。
心配してくれているのに、何てことをしているのだと思うが、彼に謝る気にすらなれない。
今の腐りきった自分も、これまで青島さんのためにと浮かれてテニスをやっていた自分も、どうしようもないほどに嫌になった。
こんな自分が、誰かに好かれるわけがない。
今、青島さんはどうしているのか、伊藤と一緒にいるのだろうか。いつも通りならば青島さんはテニス部にいて、伊藤はテニススクールに向かっているはずの時間帯だが……。
そもそも二人は付き合うことになったのか、それすらもわからないのだ。伊藤が女性と付き合っている図が想像できないが、青島さんほど魅力的な女性の告白を、断れるのだろうか。そんな事を考えていると、涙が浮かん

できた。
　このままじゃいけない。画面に集中しようとすると、いつの間にか魔法使いが死んでいることに気づいたが、どうでもいい。そのまま棺桶に入っていろ。
　嘆息しながらコントローラーをいじっていると、しばらくだまっていた友人が口を開いた。
「じゃあ、テニススクールに通うってのはどうだ？　それなら青島さんに会わなくても、テニスが出来るだろ」
「テニススクールなんて通う奴は、本当にテニスが強くなりたいテニス馬鹿ぐらいだなぁ。うちにはちゃんとした指導者もいないし、結構多くの先輩とかが通っているんだよ……すぐにバレて、連れ戻されるだろうな」
　そうかと少し残念そうに呟いた友人を見て、再び溜息が口から洩れる。名案だとでも、思ったのだろうか。
「別に俺は強くなりたいわけじゃねえ。つうか、そもそも俺にとってテニスは、青島さんに会う口実でしかねえんだよ」
　そこまで言うと、切り上げるには丁度いい時間になっていることに気づいて、ゲームを終わらせて彼の家を後にした。
　夕暮れの時刻が過ぎて、だんだんと暗くなっていく空を見上げながら、これからどうするか考えるが、何も思い浮かばない。これ以上テニス部にいても辛いだけだが、だからといって代わりの何かなんて今の自分にはない。
　この四か月、本当に青島さんのことしか考えてなかったのだ。辛い練習だって、青島さんにサボっている姿を見せるわけにはいかないと必死について行ったし、テニスが強くなれば青島さんに気に入られるかと、授業中もどうすれば伊藤に勝てるのか考えていた。
　失恋した今、俺はこれから一体どうすればいいのだ。このまま何もせずに腐っていくのだろうか。そう考えていると、後ろから聞き覚えのある声で呼びかけられて、振り返った。
　肩にラケットバックをかけ、少し不機嫌そうに口をへの字にした伊藤が、そこにいた。
「随分と久しぶりだな。元気そうじゃないか」
　いつも愛想こそはないが、ここまで嫌味たっぷりなのは初めて見た。おそらく彼は部活に出た後、テニススクールで練習した帰りだろう。何で会いたくない奴に偶然会ってしまったのかと考えながら、伊藤から目をそらした。
　いつも容赦ない伊藤が、何を言ってくるのか怖かった。
「……一つだけ言っておく」
　その冷たい言葉に、びくりとして顔をあげた。
　鋭い伊藤の目と、俺の目がぶつかる。
「やる気がないのなら辞めちまえ。先輩もマネージャーも迷惑してる。それに、目障りだ」
　そう言い放つと、もう用はなくなったと言わんばかり

に歩き出す。俺のすぐそばを通り過ぎ、速い足取りでどんどん進んでいく。その力強い足取りに、何故か悔しくなって両手を握りしめた。

悔しいが、伊藤の言う通りだった。

失恋した今、テニスをやる理由もなくなったし、やる気も全てなくなった。そんな人間がコートにいても、空気を悪くするだけだ。

だが、どんどん遠ざかっていく伊藤の後ろ姿を見て、ふとそれでいいのかという疑問が心の中で浮かんだ。このまま伊藤を見送ってしまうと、もう二度とテニス部に戻れないのではないか。

そんな恐怖から、気がついたら伊藤を呼び止めていた。

再び、伊藤の無表情な顔と睨み合うことになった。

夏だと言うのに、俺たちの間には冷たい空気が漂い、自分で引き止めておきながら居心地が悪かった。もういいじゃないか。今テニスを辞めると言えば楽になる。そう思い始めたころ、伊藤がゆっくりと閉ざしていた口を開いた。

「どうするか決心ができないのなら、俺が決めさせてやる」

「……なんだって？」

「お前の好きな『勝負』をしてやる」

そう勝手に言うと、もう暗くなった空を見上げた。

「流石に今からは無理だな。明日部活が始まる前にコートに来い。二度とテニスをやりたくないと、思わせてやる」

またもや勝手に言うと、再び歩き出した。

その遠くなっていく背中を見て、今日はやけに饒舌だったなと関係のない事を考えていた。

「ザベストオブワンセットマッチ。伊藤サービスプレイ」

静かにそう言って、伊藤はトスを上げた。トスの位置からスピンサーブだと見抜く。こすり上げるように打つ、スピードはないがトップスピンのかかった、高く跳ね上がるボール。バック側に打たれたそのサーブを、ラケットを両手に持ち替え、打ち返す。

ライン際に返された鋭いボールを、斜めに打ち返す。伊藤のお手本の様な片手バックから、ボールは逆サイドに一直線に走る。

走っても、取れない。

いつもなら食らいつこうとするだろうが、走り出すことができなかった。伊藤に言われた通り部活が始まる前にコートに来たが、モチベーションが全く上がらない。

部活を辞めてこのまま腐っていくのも、青島さんと会うのも恐ろしい。どっちを選んでも、後悔することになりそうで、どちらも選べない。

「ゲーム伊藤。スリーゲムストゥラブ。コートチェンジ」

迷いながら、ただ伊藤のボールを返していると、いつの間にか三ゲームも取られていた。当たり前だ。実力がそもそも違う上に、本気になれないのだから。
この試合を早く終わらせて、テニス部なんかとっとと辞めよう。そうすれば青島さんとも接点がなくなる。青島さんなんか忘れて、部活も辞めて、後はこの一週間のようなくだらない毎日を過ごせばいい。
何も暑い中苦しい練習をする必要も、彼女に会って心を痛める必要もない。元々青島さんがいるから入ったテニス部なのだ。失恋してしまったのだから、テニスをやる必要もない。ただラケットでボールを打つだけの競技に魅力なんてない。
そう考えれば考えるほど、昨日の伊藤との別れ際のように、これでいいのかという疑問が頭の中で渦巻く。
コートチェンジをするために、ネットを張るポールのすぐ傍で伊藤とすれ違う。どこまでも鋭く、真っ直ぐな伊藤の瞳を、まともに見ることができなかった。
俯いて通り過ぎようとするが、伊藤に呼び止められた。
「今まで下手糞も下手なりに頑張っていると思っていたが……本気でやるつもりがないのなら、今すぐコートから出て行け」
その言葉に、悔しくてラケットを強く握りしめた。
「そして、俺等の前に姿を見せるな……不愉快だ」
「……野郎！」
思いっきり胸倉をつかんで、ぶん殴ってやりたい衝動にかられたが、必死になって抑えた。むかつくことに、伊藤は何一つ間違ったことは言っていない。
間違っているのは、自分だ。
そう言い聞かせて、ベースラインまで伊藤から背を向けて歩いて行った。左手にボールを持って、反対側のコートで構えている伊藤を睨みつける。
俺は、こいつが大嫌いだ。
無愛想で無表情で、何を考えているかわからないし、いちいち話すことがむかつく。青島さんもこいつに取られたし、その上テニスが強い。
大嫌いなんだよ。伊藤も、テニスも。
そう心の中でつぶやきながら、トスを上げた。真っ直ぐ頭上に上がり、果てしなく広がる蒼穹から落ちてくる黄色いテニスボール。
足にぐいっと力をこめて、クレイコートの大地から離れる。ラケットを振り上げ、一番高い位置でガットとボールが出会う。
回転のないフラットサーブが、最短距離でサービスラインに突き刺さる。しっかりと腰を落とした伊藤が、左側ラインぎりぎりに打ち返してくる。
何とか追いついて、あまり得意ではない両手バックで伊藤を走らせる。お互いに取りづらいところへ打ち込み、相手を走らせてミスを待つ。

短いボールを、前に出て強打する。アプローチの練習で、何度もやってきた。ネット際に出てボレーを決めてやる。

その考えを読んだのか、高くボールが上がる。届くわけがないし、追いかけても打ち返すなんて無理だ。アウトになることを祈りながら振り返るが、ベースラインの三十センチぐらい手前に落ちた。

「……くそっ」

小さくつぶやいて、そのボールを取りに行った。

「ラブフィフティーン」

カウントをして、再びトスを上げる。

真上に投げ上げるフラットサーブと違い、自分の頭の上方に投げるスピンサーブ。さっきの伊藤ほどの威力はないが、俺もそのサーブには自信がある。

普段、伊藤と無意味なまでに張り合っていたのは、青島さんがいたからだ。青島さんにいいところを見せたくて、また青島さんと親しい伊藤に敗北を味わわせたくて、必死になって追いつこうとしていた。

今、ここに青島さんはいない。

頑張る必要もないし、テニスだって辞めるつもりだった。

しかし、テニスをやる理由を失ったのに、体は自然に動いた。ネット際に落とされるボールを、飛び込むように駆けて、拾い上げる。再び上がったロブを、後ろに下がりながら何とか返す。

「うらぁっ！」

スライス回転のかかったボールが、コートの隅でバウンドを変える。伊藤は何とかラケットにそれを当てるが、こちらのコートまで返すことはできなかった。

「ゲーム俺。スリーゲームストゥワン」

唸る様につぶやいて、額を流れる汗をリストバンドで拭う。ポケットに入れたままのボールを伊藤に渡し、ベースラインまでゆっくり下がる。

サーブ権が交代して、伊藤の得意なスピンサーブを同じトップスピンで返す。お互いに厳しいコースをついて、走らせ合う。

近くの林から聞こえてくる蝉の声に交じって、テニスボールを打つ音が響く。夏の暑いコートの上で、お互いの意地と意地がぶつかり合う。

「ゲーム伊藤……ファイブゲームストゥスリー」

伊藤がそうカウントして、左手に持ったボールをぽんぽんと地面にバウンドさせていた。このゲームを落としたら、負ける。だが、連続で二つのゲームを取れば、タイブレークだ。

そう考えていると、伊藤がトスを真上に上げた。フラットサーブ。わかった瞬間に、後ろに下がった。高い打点から振り下ろされるように打たれたサーブが、ネットに突き刺さる。

「危ねえ……」
そう呟いて胸を撫で下ろすが、動揺を隠せなかった。今まで、伊藤のフラットサーブを見たことがなかった。その上、そのサーブは先輩たちのそれよりもずっと速かった。
すぐに伊藤はポケットから次のボールを出して、セカンドサーブを打つ。今度は、入った。その速度についていけずに、空振りしてしまった。
「フィフティーンラブ」
ボールを回収すると伊藤はそう呟いて、次のサーブの準備をした。
今までのは、本気ではなかったのか。
そう思ったが、テニスに関して手を抜くような男ではない。おそらく、入る可能性が低いサーブを使いたくなかっただけなのだろう。
次のサーブはバック側に飛んできた。ただでさえスピードについていけないのに、バックに来られたらどうしようもない。
「……くそっ」
悪態をつくが、伊藤にはまだフラットでコースを打ち分けるようなコントロールはないはずだ。そんなことができるのなら、最初から使っているだろう。
五回目の、フラットサーブのトスが上がった。
何としても打ち返そうとしたが、振り遅れた。タイミングがずれてガットに当たったボールは、コートのすぐ脇にあるフェンスにけたましい音を立ててぶち当たった。
肩で息をしながら、何故か自然に笑いがこぼれてきた。
負けたくない。誰のためでもなく、自分のために勝ちたい。絶対に、勝つ。相手がたとえ自分より強い選手であっても、負けるわけにはいかない。
「フォーティーラブ……マッチポイント」
四連続で、サービスエースなど取られてたまるものか。
凶悪なフラットサーブを、四回目にして何とか返す。そのボールを伊藤は鋭く返してくる。心なしか、それも速くなって来ているように感じる。
くそう。心の中で叫びながら打つと、ラケットのフレームにボールが当たった。高く上がったボールの落下地点に伊藤が素早く移動して、スマッシュの構えを取った。
後ろに下がる余裕もない。
真っ直ぐに飛んでくるスマッシュをノーバウンドで返そうとしたが、ラケットを吹き飛ばされてしまった。
「……ゲームセット&マッチ」
いつも通り静かに呟かれた声を聞きながら、両手を痛いほどに握りしめて、好敵手を睨んでいた。

「一週間も休んで、どうしたの？　心配していたんだよ」
「ははは、すみません」

本当に心配していたであろう青島さんに、苦笑しながら答えた。失恋のショックで休んでいたなどと言えるはずもなく、また伊藤とどうなったのかも聞けなかった。
「新倉君は、これまで休んだことなかったから、余計に気になって……何かあったの？」
「……ちょっと。でも、もう大丈夫です。これからは今まで以上に気合を入れて、上を目指すことを決めました」
ぐっと握り拳を作って言うと、一瞬きょとんとした青島さんは、本当にうれしそうな笑顔を浮かべてうなずいた。
その笑顔を見ていると胸が苦しくなり、自分のことを見ていないとわかった今も、俺は青島さんのことが好きなのだと気づいた。そのことを悟られないように、またこれ以上苦しくならないように、俺は彼女から離れると、ベンチで座りながらテニスシューズに履き替えている先輩の隣に座った。
「先輩。ひとつ聞いていいですか？」
「別に、構わねえよ」
「この辺で有名なテニススクールとかって、ありますかね？　そろそろ通いたいんですけど」
んーと少し唸ってから、俺もスクールには通っていないからわからないと先輩は答えた。そうですかと、うなずいていると、先輩は思い出したかのように付け加えた。
「そういや、お前がテニススクールに行かないのって、青島と会う時間が少なくなるからじゃなかったのか？いいのか、行って？」
「……はい」
うなずきながら、テニスコートが一面あいていることに気づき、サーブの練習でもしようと、置いていたラケットを取った。
「今は、ただ強くなりたいんです。誰にも、負けないように」
「それなら」
後ろから急に涼しげな声が聞こえて、びくりと肩を震わせて振り返ると、後ろに無愛想野郎が立っていた。
「テニススクールに通うより、改造手術でもうけるんだな」
そう言って伊藤は、口元に薄い笑みを浮かべた。
その珍しい表情に度肝を抜かれるが、しかしひどく馬鹿にされたことに気づいて、さっさとコートに入っていく伊藤の背中に怒鳴りつけた。
「おい、てめぇ。鉄仮面！　試合だ試合！　なめてるんじゃねーぞ、ぶっつぶす……って、おい。聞けよ！」